

食料経済学特論 I (2単位)

担当者氏名 藤島 廣二

◆学習・教育目標

現在では、周知のように、世界のどこからでも食料を輸入することが可能である。そのため、大豆や大麦のように90%前後、あるいはそれ以上を輸入に頼っているものさえある。自給率が高いといわれていた野菜でさえも、今日では20%前後を輸入に頼っているほどである。

このように輸入が著増したことによって、食料の流通システムは当然、過去に例を見ないほどにグローバル化した。また、国内の流通システムも著しく変化した。

本特論では、こうした流通システムの変化を講義と互いの討論を通して把握し、それによって国内外の経済の動きを理解できる能力を養う。

◆取り扱う領域 (キーワードで記載)

| | | | |
|----|-----|-------|----|
| 流通 | 農産物 | グローバル | 商流 |
| 食料 | 青果物 | 卸売市場 | 物流 |

◆授業の進行等について

| | テーマ | 内容 | 授業のねらいまたは準備しておく事項 |
|----|----------------------|-----------------------------------|--------------------------------------|
| 1 | 経済学・流通基礎理論 | 経済学基礎用語の理解と流通論の課題を把握する | 用語の内容に関する共通認識を得ると同時に、基礎理論を把握する。 |
| 2 | (第1～3週) | | |
| 3 | " | " | " |
| 4 | " | " | " |
| 5 | 品目別流通システムの効率化のあり方とそれ | 米穀、野菜、果実、食肉、水産物、加工食品の流通システムに関する既存 | 既存研究をレビューし、そこから新たな研究の出発点を明確にする。また、自分 |
| 6 | に関する既存の研究成果 | の研究成果を検討し、その中で効率化 | が研究する際の流通システムのあり方 |
| 7 | 果のレビュー | をどのように論じていたかを議論す | の論じ方を把握するようにする。 |
| 8 | (第4～第11週) | る。 | " |
| 9 | " | " | " |
| 10 | " | " | " |
| 11 | 国産農水産物の輸出の | 各自が特定の品目に絞り込んで、当該 | 輸出農水産物の流通システムの調査方 |
| 12 | 現状と問題点のシステ | 品目の現在の輸出システムを物流と | 法を会得すると同時に、調査結果の理論 |
| 13 | ム論的解明とその効率 | 商流の両面から調査し、その問題点と | 化・まとめ方を理解する。 |
| 14 | 化策の提示 | 今後のあり方を究明・検討し、それを | " |
| 15 | (第12～15週) | 各自が報告する。 | " |

◆教科書及び資料 (授業前に読んでおくべき本・資料)

書名／著者／発行所 (発行年)
 新版 食料・農産物流通論／藤島廣二他／筑波書房 (2012年)

◆授業をより良く理解するために便利な参考書・資料等

書名／著者／発行所 (発行年)
 業務・加工用野菜／藤島廣二他／農山漁村文化協会 (2008年)、市場流通 2025年ビジョン／筑波書房 (2011年)

◆評価の方法 (レポート・小テスト・試験・課題等のウェイト)

各自の報告と他者との議論の内容とに基づいて評価する。

◆その他受講上の注意事項

現実を踏まえた独自の理論を展開するつもりで議論に参加するように務めること